『塩の道』松野　功

令和4年4月　柊書房刊

生前から歌集の上梓が父の夢であった。生前には間に合わなかったが、多くの皆様方の御蔭をもって歌集を出版させて頂くことが出来た。改めて深く感謝申し上げたい。

父は癌を患ってから亡くなるまでの五ヶ月間、布団一枚という狭い行動範囲の中で短歌を作り続けた。本当に短歌が好きだったのだと思う。父は私に短歌について話すことがほとんどなかった。また、自分の生い立ちや、人生観などについて語ることもほとんどなかった。そのため、歌集を読んで思ったことは、背景やバックボーンの分からない短歌が多いということ。昔の短歌は特にそう思う。父のことを本当に何も知らなかったのだなと、亡くなってから改めてそう思った。

父に逆らうつもりは毛頭ないが、私自身、父の望むような生き方をしてこなかったと思う。だが、父は底抜けに優しかった。全てを受け入れてくれた。そんな人柄が無骨で粗削りではあるが、父らしい短歌に表れている。

（松野　禎）

――歌集の著者から――

『雉子は走れり』喜多　功

令和4年4月　柊書房刊

父の第二歌集『雉子は走れり』が上梓されてから一年余り、歌集を手に取ってくださった方から、たくさんお便りをいただきました。驚いたのは、読む人によって心に残る歌が異なり、また同じ歌に対しても感じるものが違っていたこと。以前「歌に詞書はつけないのか」と尋ねた私に、父が「それぞれの気持ちで読んでもらえばよい」と言ったことを思い出しました。歌は、小さな一人の人間の中から生まれたものではあるけれど、受け手の様々な思いの中でその世界を広げていく、不思議な創作物なのですね。

今年の春、父は八十七歳になりました。農作業に歌に毎日全力を出しきって、前のめりに生きているようだった父ですが、それを忘れてしまったかのように、今は穏やかに過しています。「もう歌は詠まないの？」と尋ねると「詠む。今作っとる」と言っていますが、なかなか形にはならないようです。

（喜多　千明）

『カノープス燃ゆ』片岡　絢

令和4年5月　六花書林刊

第二歌集です。第一歌集である『ひかりの拍手』は、十代～二十代の約十年間の歌をまとめたものでした。それでなんとなく、第二歌集を作るならば自分の三十代の十年分の歌を収められれば区切りがいいなあと思っていて、そうなりました。

第一歌集のときもそうでしたが、今回も、「コスモス」などに毎月ばらばらと載っていた歌が一冊になることで、大掃除をしたようなスッキリ感がありました。私の歌集は自費出版なので、ある程度のお金が必要なこともあり、自分としては、十年に一度の贅沢、自分へのご褒美みたいなものかなあと思っています。

歌集の出版後しばらくは（数ケ月くらい）、感想のお手紙やメールなどが届き続けます。帰宅して郵便ポストを開けるのがたのしみな、しあわせな時期となります。そしていつまでも、選歌してくださった高野公彦先生や、出版社の方々、いつもの短歌仲間への感謝の思いは胸にあたたかく、出版以後も在り続けています。

――歌集の著者から――

『聴雨』鈴木竹志

令和4年6月　六花書林刊

歌集刊行後、多くの方から礼状をいただいたが、「表現」の編集発行人の結城千賀子さんからのお手紙には驚いた。結城さんからのお手紙には、この秋に「雨を聴く」と題する歌集を出すと認めてあったのである。ぼくの歌集の題は漢語のままの「聴雨」、結城さんの歌集は「聴雨」を書き下しにした「雨を聴く」。偶然とは言え、こういうことがあるのかと驚いた。さらに、驚いたのは「うた新聞」十二月号に『聴雨』の歌集評を結城さんが書いてくださったのだが、その後、同じ「うた新聞」の一月号に、結城さんの『雨を聴く』の歌集評の依頼があったのだ。題の似通った歌集を相互に批評し合うというのは、かなり珍しいことではないかと思う。要するに縁というものだが、かつて『孤独なる歌人たち』で取り上げた加藤淑子氏について、近年結城さんの発言が多いのも、ぼくにとっては嬉しいことだ。歌壇的には不遇であった加藤淑子氏の斎藤茂吉関係の評論への顕彰が続くことが楽しみでならない。

『白い消しゴム』志賀日出子

令和4年6月　柊書房刊

『白い消しゴム』はコスモスに入会してから二十年目の節目に上梓した私の第一歌集です。私は三十三年という長い間、八十歳になるまで会社の事務員として勤務しておりました関係上、気に入った消しゴムを使っておりますといつの間にか小さく本当に豆つぶほどになればなるほど愛着があり、昨年退職するときには大切に持って帰り今も机の引出しに仕舞ってあります。まさかその消しゴムが歌集名になるとは夢々思わなかったことでした。

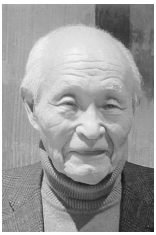
私が短歌と出会ったのは、旭川の公民館で短歌講座を受講したのが私と歌の初めての出会いでした。

その後小林孝虎氏の主宰されておられました「北方短歌」に入会、ここで沢山のことを学ばせて頂きました。その後十年間歌の世界から遠ざかっておりましたところコスモス旭川支部の甲斐千枝子さんからもう一度歌を作ってみませんかと誘われ平成十四年七月号から出詠し、丁度二十年目の節目に出版させて頂きました。

――歌集の著者から――

『象の眼』奥村晃作

令和4年7月　六花書林刊



たまたまコロナ禍での三年間の暮らしに詠嘆を詠んだ作、六〇〇首を収録。

刊行後、一番気になるのは、どの歌を皆さんが良しとされたか、どの歌が推されたかと言う事。

一番多くの方から良しとされたのは、歌集名の元ともなった、次の作。

・〈象の眼〉と妻が言いたり〈象の眼〉は疲れ切ったる時のわれの眼

続いて多くの方が良しとして推されたのは次の二首。

・技巧的表わし方が好きでない真っすぐに詠むオクムラ短歌

・目の玉を手術されつつ目の玉は手術の一部始終を見てた

続く作も上げておく。「「戦争は悪だ」と叫びし柊二師の歌読み解きて講演を閉ず」「会の前持参のパンを食べていた岡井さん机に包みひろげて」「人間が、歌が、生きざまが面白いうたびと岡井は死んでしまった」。以上

『火の記憶』大西淳子

令和４年７月　青磁社刊

歌壇を知らず、結社を知らず、独学で短歌を始めて約二年間の作品を二〇〇一年に第一歌集として出版してしまった私は、完全にスタートを間違えました。二八歳でした。

この半年後、コスモスに入会し本当の第一歌集となる第二歌集『さみしい檸檬』を出版したのは二〇一六年。コスモス入会から一五年が経ち、年齢も四四歳となっていました（作品は四二歳までのものを収録）。

スタートを間違え「新人」と呼ばれる時期をなんとなく失った私は、次こそきちんと四〇代の作品を四〇代のうちに出したいと考えるようになりました。逆算していつまでに入稿すれば間に合うのか青磁社の永田淳さんにご相談し、その入稿に間に合わせるには、いつまでに選歌をお願いすればいいか選者の高野公彦さんにお尋ねし、なんとか四〇代最後の日に、今回の第三歌集『火の記憶』を上梓することができました。

出版後は、五〇代の日々を懸命に生きています。

――歌集の著者から――

『青葉櫂先』田中幸子

令和４年９月　柊書房刊

キャベツを炒めているフライパンからジャッジャッ、勢う音がキッチンの壁に響く。あっこれを詠めばいい、短歌を詠むのはこんな所からでも、と感じた。その頃カルチャー教室に入会したばかりであって高野先生の講話「主婦であることに視点を捉えて詠んでゆく」その言葉は灯になった。２００７年『ティスプーン』、２２年『青葉櫂先』を出版。落着いて考えると何だか不思議だ。

あこがれて高野公彦を読み、まぶしさの小島ゆかりを読み、コスモス短歌会のなかで長く長く詠んできた。詠んでも詠んでも自分の短歌が気に入らない。でもそれしか出来ないからとにかく締切日は守った。四半世紀が経っていた。そしていつの間にか自分で作った自分の短歌が好きだなっと思えるようになっていた。なぜなのか解らない。八十二歳のいま自分で自分の事が出来る日常を感謝しながらコスモス誌の皆様の短歌を読んでいる。日暮れきこえる水音もこんなに一首一首で違っている。読むこともこんなにすばらしい。